

從文章脈絡探討小說中 RU 形的用法

王世和

台灣 東吳大學日本語文學系 教授

摘要

小說的內容多描述過去的事情，句末形態也以表示過去的「TA 形」為主，但也可見非過去的「RU 形」，是日語學習者在理解文章時感到疑惑的問題之一。

本論文根據「考量運用能力的語學知識」(王 2018a)的提案，利用「整體內容及構成要素」「重視文章脈絡的概念」「領域別的觀點」之研究觀點進行考察。具體而言，從句末形態及文章結構角度探討小說中「RU 形」的使用情形與原因，希望能為日語教育現場提供建議。調查結果，得到主要結論如下：

- a. 經常性現象、外界描寫、背景及狀況的說明容易使用 RU 形，其句末形態多為 TEIRU、I、DA。
- b. 心中話語容易使用 RU 形，從屬度高的句子使用 RU 形的必然性也高。
- c. SHITA 的句子是故事的主要脈絡，表示連續發生的動作，不易使用 RU 形。
- d. 但若後續內容有 TA 形的句子作結束，則亦有可能使用 RU 形。

關鍵字：非過去形，歷史的現在，小說，文章結構，文章脈絡

受理日期：2020 年 3 月 10 日

通過日期：2020 年 5 月 1 日

A Study on the Usage of the RU-Form in Novels from the Perspective of Context

Wang, Shih-Ho

Professor, Department of Japanese Language and Culture,
Soochow University, Taiwan

Abstract

Novels often revolve around things that had happened in the past, with sentences usually written in past tense ended in the “TA-form”. Yet, there are also sentences in the “RU-form”. Japanese learners are often confused about this issue. This study explored the usage of the “RU-form” in novels and the reasons from the perspectives of sentence endings and article structures, to hopefully provide relevant suggestions for Japanese education practices. The main findings are summarized below:

- a. When describing a regular phenomenon, a repeated behavior, an environment, a background, or a condition, it is common to use sentences in the RU-form mostly with endings such as TEIRU, I, and DA.
- b. When describing thoughts in one’s mind, the RU-form is liked to be adopted. The possibility to adopt the RU-form is higher for sentences with high subordination.
- c. Sentences with “SHITA” used in a novel are often related to the main context of the novel, describing consecutive actions. These sentences usually are not ended in the RU-form.
- d. However, if there are sentences in the TA-form in the following context, sentences ended in the RU-form may also be used.

Keywords: non-past tense, historical present, novel, syntactic structure, context

文脈から見る小説におけるル形の用法

王世和

台湾 東呉大学日本語文学科 教授

要旨

小説の内容は、過去の出来事を描くものが多く、文末表現も過去を示すタ形が主に使用される。しかし、非過去を表すル形の使用もよく見られ、日本語学習者の疑問に関する現象の一つである。

本論文は、「運用能力のための語学知識」(王 2018a)の提案を受け、「全体的表現と部分的要素」「文脈重視の概念」「ジャンル別の視点」という研究概念を実現したものである。具体的には文末表現と文章構成の観点から小説に使われるル形の使用について考察を行い、日本語教育現場への提案を試みた。調査の結果、主に以下の結論が得られた。

- a. いつものこと、外界描写、背景・状況説明はル形になりやすく、テイル、イ、ダの文末表現が使われる。
- b. 心話もル形になりやすく、また、従属度の高い文は、ル形になる必然性も高い。
- c. シタの文は物語の本筋を構成し、動作の継起を表すため、ル形になりにくい。
- d. しかし、後続文脈でタ形に締めくくられる場合は、ル形になることもある。

キーワード：ル形、歴史的現在、小説、文章構成、文脈

文脈から見る小説におけるル形の用法

王世和

台湾 東呉大学日本語文学科 教授

1. はじめに

日本語学習者に不思議に思われる文法現象には、小説に使われるル形がある。小説は過去の出来事を描く内容が多く、文末にタ形が使用されるのが原則的である。しかし、実際にはル形の使用もあり、日本語教育の現場では長年問題とされてきた文法の課題の一つである。そこで、本稿では、「十一月三日午後の事」という物語文の小説を対象に、地の文のル形の使用状況と原因などについて分析・考察し、日本語学習者の疑問への答えを探ることを目的とする。

なお、本稿は、「運用能力のための語学知識」(王 2018a)の提案を実現し、「全体的表現と部分的要素」「文脈重視の概念」「ジャンル別の視点」という研究概念の可能性を示す研究成果の一つである。

2. 研究課題と考察対象

まずなぜ文末表現はタ形ではなくル形なのかを日本語学習者が疑問に感じるだろうと思われる用例を一例挙げる¹。

- (1) ①暫くして自分達もその踏切を越した。②すると今度は後から歩兵の一隊が来た。③その時それはかなり遠かった。④二人はあまり注意もせず話しながら来たが、その一隊は寧ろ案外な早さで、間もなく自分達の直ぐ背後に迫って来た。
(p80)

- (2) ①同じ堤防の上を此方へ向かって二十騎程の騎兵が早足で来る。②そして間もなく銃声は止んだ。③二人は堤防を下

¹ 平成元年に出版された新潮文庫から引用した用例で、丸数字は文の番号で、例文末は平成元年版のページ数を表す。また、用例は基本的には同じ段落の内容を取り上げるが、文脈が必要と思われる箇所は、前後の段落の内容を載せることもある。なお、本論文での下線はすべて筆者によるものである。

りて引き返して来た。(p81)

この二例に「一隊が来た」「騎兵が～来る」がある。何れも主人公が目にした光景を、「来る」という動詞で描写する表現である。しかし、なぜ(1)はタ形で(2)はル形なのか、このル形の使用についての説明には臨場感を高めるためというのがあるが、これは具体的にはどうということなのか。教育現場のこうした疑問に答えるのが本稿の目的である。

このような物語文のル形について考える時に、可能な研究課題としては、以下の内容が挙げられる。

- (3) a. どの文がル形になりやすいか。文末表現や文脈に何らかの特徴がないのか。
- b. なぜタ形ではなく、ル形なのか。どのような表現効果があるのか。
- c. ル形の文はタ形にできるのか、タ形の文はル形にできるのか、何らかの制約はないのか。

a は、いわゆる使用実態の調査で、日本語学習者が物語文を理解する時に最も感じやすい疑問として考えられる。b はル形とタ形がもたらす異なる表現効果で、理解と産出の両側面がある。c は、使用の制約の問題で、産出の時の疑問となる。本論文では、まず研究課題を理解の側面の a を中心に述べ、b にも触れる。c の産出の側面はまた今後の課題とする。

本論文は、1919年に『新潮』に発表された志賀直哉の短編小説「十一月三日午後の事」を考察対象とする。理由は主に三つある。十一月三日の午後という特定の時に起こった出来事を描くこと²、物語文のすべての文章構成を備えていること³、全文 182 文中 26 文のル形の使用もあることである。典型的な物語文として、研究対象にふさわしいと考えられる。

² 内容は、「自分」という人物が従弟と共に鴨を買いに行く途中で目にした軍隊の行軍の理不尽を描くものである。

³ 具体的な分析は 4.1 節と 6 節をご参照ください。

3. 学問背景

3節では、本稿の学問背景を簡単に紹介する。王(2018b:116)によると、2003年から始まった日本語教育文法の一連の研究は主に以下の三つの流れがある。

- (4) a. 「コミュニケーション能力」「四つの言語活動」(野田)
- b. 「理解のための文法」(野田)
 「産出のための文法」(庵)
- c. 「学習者の母語を考慮した日本語教育文法」(井上)
 「三位一体の研究構想」(張)
 「母語の知識を活かした日本語教育」(庵)

この一連の研究は、文法研究は日本語教育のためでないといけな
いと主張している。王(2108a)は、その理念に賛同し、文章・談話の
立場から、「運用能力のための語学知識」の必要性を提唱し、それを
実現するための六つの研究視点と概念を主張している。

- (5) 「理解と産出の関係」「全体的表現と部分的要素」「文脈重視
 の概念」「ジャンル別の視点」「客観的事実と主観的意見」「具
 体的形式と抽象的概念」。

本論文は、物語文というジャンルを対象に、そこに使われるル形
の使用状況を探ることを目的とする。ル形が使われる文だけではなく、
その全体の文脈の中で考えるため、上記の「全体的表現と部分
的要素」「文脈重視の概念」「ジャンル別の視点」の視点を用いるこ
ととなり、王(2108a)が提唱する「運用能力のための語学知識」の提
案による研究成果の位置付けとなる。

4. 先行研究

分析に入る前に、本論文の依拠となる物語文の文章構成とル形に
関する関連研究を紹介する。

4.1 物語文の文章構成

物語文の文章構成については、永尾(1975、1992)⁴では詳しい論述があり、その内容をまとめると以下となる。

(6) 特定の時

文脈起こし(事件の発端)

描写...第一の描写(話の筋)

...第二の描写(感応、発見)

説明...第一の説明(いつものこと)

...第二の説明(解説)

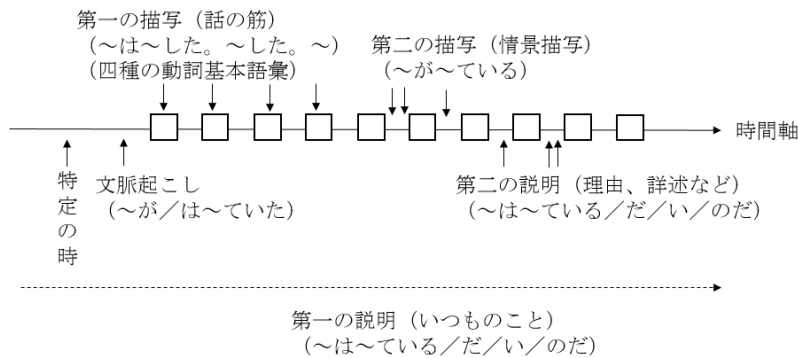


図 1 物語文の文章構成

物語文を構成する要素として、「特定の時」「文脈起こし」「第一・第二の描写」「第一・第二の説明」が挙げられている。少々長くなるが、これらの要素に関する定義や説明は以下に引用する。

(7) 事件の話をする文章にあたっては、まず、その事件のあった特定の時が提示される。第一段落の文①がそれである。次に、その時の、持続に従って変転を続けてゆく事件の発端が提示される。第一段落、第十段落の文②がそれである。(略)こうしたものを文脈起こしと呼ぶこととする(p720-721)

(8) 第一の描写は、時の持続に従って、たとえば「一分経って」

⁴永尾(1975、1992)では、過去の出来事を描く物語文のことはそれぞれ「客観的表現のまさった文章」「事件の話をする文章」の用語が使用されている。

というようなもので繋いでゆくことができるという点で特徴的である。それに対して、第二の描写は、時の持続の中で、気分や気持が生じたところで、時の流れを止めて、その気分や気持に合致した情景を写すという点で特徴的であるように思われる。(p727)

- (9) 説明にも、基本的には二つのものがあると考えられるようである。第一節で見てきたような、いつもそうであるというようなことを言う第一の説明と、前文を受けて、理由を言う、取り立てる、くわしくする等と、すべての文を確かなものにする第二の説明とである。(p735)

物語文の文章構成の定義や説明は上記となる。以下、具体例を挙げ、もう少し詳しく説明する。

- (10) ①晩秋には珍しく南風が吹いて、妙に頭は重く、肌はじめじめと気持ち悪い日だった。②自分は座敷で独り寝転んで旅行案内を見ていた。③さし当たり実行の的もなかったが、空想だけでも、こういう日には一種の清涼剤になる。④そして眠れたら眠る心算でいた。⑤其処に根戸に居る従弟が訪ねてきた。

⑥自分は起きて縁側に出た。⑦従弟は庭に溢れている井戸で足を洗いながら、

「今日大分大砲の音がしましたね」と云った。(p78)

物語文の場合、特定の時に起こった出来事を描くことで、まず、大事な構成要素としては、その出来事の時間を示す表現と、出来事の骨組みを作る「～した」による文の連鎖が挙げられる。上記でいう「特定の時」と「第一の描写」(話の筋)のことである。次に、出来事の話の筋となる「～した」が動き出す前に、その事件の発端を示す「～ていた」の文がよく使われる。文脈起こし(事件の発端)という。

例(10)では、「特定の時、事件の発端、第一の描写(話の筋)」の三つの構成要素は文①②⑤⑥⑦である。それぞれ「特定の時間(文

①)。～ていた(文②)。～が～した(文⑤)。～は～した(文⑥)。～は～した(文⑦)」の表現特徴がある。

もちろん、物語文はこれだけでは成り立たない。説明的な内容もある。文③の「こういう日には」は、特定の時に限らず、出来事背景として「いつものこと」をいう「第一の説明」である。また、文④は、前の文脈の文②から「(自分は)」という主語を引き継ぎ、文②についての「第二の説明」となる。説明には、出来事背景についての説明と、前の文の状況などについての説明と、二種類がある。

- (11) ①街道へ出ると、五間程先の道端に上半身裸体にされた兵隊が仰向けに背囊に寄りかかって寝ていた。②一人が看護している。③胸にハンケチを当てて、それに水筒から水をたらしていた。④病人は意識も不確らしく眼をつぶったまま、力なく口を開けていた。⑤その瘵顔だけは汗ばんでかなり赤い。⑥立ち止まって見るのがいやだった。(p82. 83)

最後に、「第二の描写」(感応、発見)が残るが、これは「第一の描写」(話の筋)と同じく客観的表現で、「～が～ている」(文①②)などの表現が使われ、登場人物が目にした情景などの外界的な情報を描く。ちなみに、(11)文④⑤は「～は～ている／い」の文構造を持ち、(10)文④同様、前の文脈の話題についての解説で、「第二の説明」となる。

4.2 ル形の主な見解

過去の出来事を語る時のル形は昔から論じられている。本節では、代表的な論述を幾つか紹介し、本論文が参考する点と、研究の位置付けを述べる。なお、下線は筆者によるものである。

4.2.1 永野賢(1986)

まずは、永野(1986)「歴史的現在」があり、ル形に関しては最も重要な指摘として考えられる。

- (12) 歴史的現在の手法は、普通は、現在形表現だけで押し通すの

でなく、過去形表現のあいだあいだに現在形表現がはめこまれることによって効果を発揮するのであるが、文章の陳述という観点からその問題を考えてみると、現在形表現は、過去形表現によって何らかの形でしめくられることになっているとみることができる。(p268)

(13) (一)は、作者の耳にした“子どもたちの声”の系列。

(二)は、“作者自身の行動”の系列。

(三)は、作者の目にした“子どもたちの行動”の系列。(p268)

4.2.2 石黒圭(2004)

石黒(2004)は「描写の文章」「説明の文章」「情報の焦点」の三つの観点からル形が使われる理由を述べている。

(14) 過去の出来事の描写や説明では、タ形だけでなくル形も使うことができる。過去の描写ではタ形を使うと執筆時の時点から過去を振りかえる回想視点になり、ル形を使うとその場において状況を描写する臨場感のある視点になる。また、過去の説明では、タ形を使うと、過去の出来事とは切りはなして過去の時間の流れのなかで説明するのにたいし、ル形を使うと執筆の時点で整理した、まとまった内容の一例を示すことになる。(p48-49)

(15) ル形とタ形を巧みに使い分けられれば、情報の焦点がどこの当たっているかを示し、書かれている内容を読者に印象的に伝えることができる。(p49)

4.2.3 日本語記述文法研究会(2007)

日本語記述文法研究会(2007)は、ル形の「特殊な意味・用法」として、「小説などの地の文での表現効果」ことを指摘している。

(16) こうした過去形を基調とした文章の中にあえて非過去形を用いることで、作中人物の視点に寄りそった、生き生きとした描写にすることができる。

(略)

語り手の視点の中に、非過去形が表す作中人物の視点が混在

することによって、目の前にその状態が存在していたり、今まさにその事態が展開しているといった感覚を読者に与えることができるのである。(p134)

4.2.4 工藤真由美(2014)

工藤(2014)は、小説の中の会話文を対象にテンスの考察を行った。地の文を対象とする本論文とは直接な関係はないが、参考として以下の内容を紹介しておく。

まずは、「テンス」の三つの研究課題については以下のことをのべている。(p141)

(17) 1) どのような場合に、基本的なテンス形式の使用が義務的であるのか。

2) どのような場合に、現在(あるいは未来)の事象に過去形を使用することができるようになるのか。

3) どのような場合に、過去の事象に非過去を使用できるようになるのか。(p141)

また、テンスの全体的用法については下記のことを指摘した上で、永野(1986)が指摘した「劇的現在」(いわゆる歴史的現在用法)についても下記のことを述べている(p165)。

(18) 以上の用法の特徴をまとめると次のようになる。

① 話し手が〈知覚体験〉している〈現在〉と〈過去〉の個別具体的な事象である。

② 常識的には考えにくい事象であるがゆえに、その事象に対する話し手の評価感情を伴っている。

4.2.5 まとめ

ル形に関する四つの論述を以上に紹介した。以下、考察対象、歴史的現在、臨場感の三点に分けて述べる。

まずは、考察対象である。本論文では、物語文というジャンルに限定し、その中の地の文を対象とする。この点においては、「小説などの地の文での表現効果」について論じる日本語記述文法研究会(2007)と、小説の地の文しか用例に挙げなかった永野(1986)全く同

じである。また、石黒(2004)が挙げた三つの話題の中の「描写の文」の対象とも重なる。一方、小説の中の会話文を考察する工藤(2014)とは異なり、書き言葉的側面と話し言葉的側面の違いがある。

次に、歴史的現在については、永野(1986)と工藤(2014)が言及しているが、考察対象が地の文と会話文の違いがあり、7節では同じく地の文を考察した永野(1986)の考え方を踏まえて論じる。

最後に、いわゆる臨場感のことについては、石黒(2004)では、「その場において状況を描写する臨場感のある視点」、日本語記述文法研究会(2007)では、「作中人物の視点に寄りそった、生き生きとした描写」「目の前にその状態が存在していたり、今まさにその事態が展開している」、の説明がされている。何れもル形の使用による臨場感の説明であり、ル形が現れやすい文脈や、その表現方法についての説明がない。

以上の三点を踏まえて、改めて本稿の位置付けを以下に確認できる。本稿の考察対象は、過去の出来事を描く小説の地の文に限定する。その中でのル形の文末表現について分析し、物語文の文章構成を踏まえて、ル形になりやすい文末表現と文章の構成要素を指摘する。文末表現と文章構成は従来の研究にない研究視点で、以下、5節と6節に分けて論じる。

5. 文末表現から見るル形の分析

本節からは、具体的な分析に入る。5節では、文末表現から、6節は、文章構成の視点から分析する。繰り返すが、「十一月三日午後の事」は全部で182文、その中で26例のル形が使われている。そのすべての用例は、文末表現の視点から以下の四種に分類ができる。

5.1 テイル類(11例)

(19) この蒸暑いのに皆外套を着ている。(p80)

(20) 蒸し風呂から出てきた人のような汗が皆の顔に流れている。

(p80)

(21) 堤防と云っても現在水の流れている所までは一里程もあつ

て、その間は眞菰の生い茂った広々とした沼地になっている。

(p81)

(22) 一人が看護している。(p82)

(23) かなりの急ぎ足で歩いている。(p83)

(24) 然し黙っている。(p83)

(25) どれもこれも、ぼんやりと何の表情もない顔をしている。

(p84)

(26) 倒れたきりでいる。(p83)

(27) 直ぐたわいなくつぶれて了う。(p84)

(28) 力なく半分閉じた眼をしていながら、その兵隊は上半身裸体のまま起き上って歩き出そうとする。(p84)

(29) 両側から一人ずつその腋の下に腕を差し込んでまいったままにどんどん隊の歩度で急いでいく。(p83)

この 11 例では、直線の文末表現は動詞述語ではあるが、アスペクト形式がついている。テイル以外に、「でいる」「てしまう」「(よ)うとする」「ていく」もある⁵。いずれも、動詞にアスペクト形式がついているため、「テイル類」でまとめる。

5.2 イ類(6 例)

(30) その顔には何の表情もない。(p83)

(31) そして倒れた人は何も云わない。(p83)

(32) 羽ばたきをして地面をかけようとするが首がもう上らない。

(p85)

(33) 然し何故か真直ぐには浮かばない。(p85)

(34) その癩顔だけは汗ばんでかなり赤い。(p82)

(35) 幾ら暑くてもそれは命令で勝手には脱げないらしい。(p80)

ナイをはじめとする「い」で終わる表現である。ナイ以外に、「動詞+ない」、形容詞、助動詞の「らしい」もある。この種の用例は、

⁵ 「でいる」は状態を表す「で」と継続を表す「いる」から構成される。典型的アスペクト形式ではないが、同じく「いる」の構成要素をもつ関連用法として考えられ、ここに分類することにした。

品詞の観点からは異質のものではあるが、「い」で終わる表現と静的述語であることに共通点がある。5.1 のアスペクト表現が付く動詞述語に対し、(34)「赤い」の用例のように形容詞述語の側面がある。大事なこととして確認しておきたい。「イ類」でまとめることとする。

5.3 ダ文(2例)

(36) それは早晩如何な人にもハッキリしないではない事がらだ。
(p85)

(37) まがる所をまがらずに来たのだ。(p85)

この二例は「ダ」で終わり、名詞述語文の一種として考える。二例しかないが、上記の動詞述語、形容詞述語の類に対し、「ダ文」の分類を立てることとする。

5.4 その他の動詞文(7例)

(38) そして全く黙り込んで、只急ぐ。(p80)

(39) 皆は見ながら黙って急ぐ。(p83)

(40) さし当たり実行の的もなかったが、空想だけでも、こう云う日には一種の清涼剤になる。(p78)

(41) 毎年今頃になると寒さに弱った蜂が陽あたりのいいこの部屋の天井へ来て集まる。(p79)

(42) 芝居で殺された奴が俯伏しになった場合よくそう云う動作をする。(p84)

(43) その朝丁度東京へ出したところだと云う。(p81)

(44) 同じ堤防の上を此方へ向かって二十騎程の騎兵が早足で来る。(p81)

5.1～5.3では、動詞・形容詞・名詞述語文の類を挙げた。5.4の7例は、動詞述語文ではあるが、アスペクト形式がないものである。更に以下に分類できる。

まずは、(38)(39)の「急ぐ」は「急いで行く」にも書き換えられ、形の上ではアスペクト形式はないが、意味的には5.1節のテイル類に近い。次に、(40)～(42)は「こう云う日には」「毎年」「よく」とあり、一回限りの動作ではなく、繰り返しや、いつものことをいう

表現である。最後は、(43)(44)の「云う」「来る」は過去における一回限りの動作で、どの分類にも属さない特殊な用例である。

5.5 文末表現の観点からのまとめ

このように、文末表現からの観点では、ル形になりやすい内容は以下にまとめられる

(45) a. テイル類、イ類、ダ類で終わる文。

b. 繰り返しやいつものことを言う文。

a はいわゆる静的述語で、b は一回限りのことではないことを特徴とする。この二点を踏まえて逆に言うと、それ以外の場合は、普通はタ形が使われることとなる。つまり、(43)(44)の「云う」「来る」のような、一回限りの動的述語は殆どタ形が使われているが、なぜかこの二例だけル形になっている。ル形の 26 の使用例の中でも最も特殊で、7 節でもう少し考える。

6. 文章構成から見るル形が使われる理由

本節では物語文の文章構成の観点からル形が使われる理由について考える。前節と同じ用例であり、少々長くなることもあるが、文脈を踏まえての分析であるため、ル形の文以外にも必要な内容を引用する。なお、4.1 節の「物語文の文章構成」に基づき分析する。

6.1 第一の描写(話の筋、2 例)

4.1 節で述べたように、「第一の描写」とは、いわゆる話の筋というもので、「時の持続に従って、たとえば「一分経って」というようなもので繋いでゆくことができるという点で特徴的」である。一つ一つの文は出来事の一コマとして物語の本筋を作り、動作・動きの継起を表す。

この二例では、「第一の描写」に当たるのは点線と直線のところで、例(46)は文①③⑤⑥の「外れて入った／行った／云う／云った」で、例(47)は文①②③の「来る／止んだ／引き返して来た」である。一回限りのことでもあるため、「～した」というタ形が基本的で、「云う／来る」のル形は特殊な例となる。26 あったル形の中でも下記の

直線の二例しかなかった。

(46) ①東源寺と云う榎の大木で名高い寺への近道の棒杭のある所から街頭を外れて入った。②左手の畑道を騎兵が七八騎一列になって、馬を暢気に歩かせていた。③間もなく、自分達は竹藪の中のじゅくじゅくした細い坂路を下りて、目的の鴨屋へ行った。

④鴨は一羽もなかった。⑤その朝丁度東京へ出したところだと云う。⑥そして「今あるのはおしどり位です」と云った。

(p81)

(47) ①同じ堤防の上を此方へ向かって二十騎程の騎兵が早足で来る。②そして間もなく銃声は止んだ。③二人は堤防を下りて引き返して来た。(p81)

6.2 第二の描写(感応、発見、2例)

「第二の描写」は、「時の持続の中で、気分や気持が生じたところで、時の流れを止めて、その気分や気持に合致した情景を写す」もので、外界的な情景を描くのを特徴とする。いわゆる情景描写のことである。文の特徴としては、「～が～ている」(～である／いる／ある／～い)などがあり、点線と直線は「第二の描写」だが、ル形の使用は今回の調査では、直線の二例あった。

(48) ①街道へ出ると、五間程先の道端に上半身裸体にされた兵隊が仰向けに背囊に寄りかかって寝ていた。②一人が看護している。③胸にハンケチを当てて、それに水筒から水をたらしていた。(p82.83)

(49) ①この蒸暑いのに皆外套を着ている。②幾ら暑くてもそれは命令で勝手には脱げないらしい。③帽子だけは皆手に持っていた。④それにはやはり白い布が巻いてあった。⑤然しそれも先頭に歩いていた若い士官が一寸後ろを向いて何か簡単な号令をかけた時に皆は被って了った。⑥蒸し風呂から出てきた人のような汗が皆の顔に流れている。(p80)

6.3 第一の説明(いつものこと、4例)

「第一の説明」は、「いつもそうであるというようなことを言う」内容で、「～は～る／ている／だ／い／のだ」の表現を特徴とする。この種の例には、「いつもこうだ」という意味を示す例のほかに、一回限りでない繰り返しの例も同類のものとしてまとめる。下記の例では、「こう云う日には／毎年／二三度／よく」とあるように、計4例がある。

- (50) さし当たり実行の的もなかったが、空想だけでも、こう云う日には一種の清涼剤になる。(p78)
- (51) 毎年今頃になると寒さに弱った蜂が陽あたりのいいこの部屋の天井へ来て集まる。(p79)
- (52) ①直ぐたわいなくつぶれて了う。②二三度その動作を繰り返した。③芝居で殺された奴が俯伏しになった場合よくそう云う動作をする。(p84)

6.4 第二の説明(解説、18例)

「第二の説明」は、「前文を受けて、理由を言う、取り立てる、くわしくする等と、すべての文を確かなものにする」もので、先行文脈から一つ的话题を引き継ぎ解説する働きがある。「～は～ている／だ／い／のだ」などの文型を特徴とする。直線と点線の文は「第二の説明」となるが、ル形の使用は最も多く見られ、19例もある。

- (53) ①二人は主がそれを取って来る間、一町程先の利根の堤防へ行って見た。②堤防と云っても現在水の流れている所までは一里程もあって、その間は眞菰の生い茂った広々とした沼地になっている。(p81)
- (54) ①五六間来ると其処にも一人倒れていた。②力なく半分閉じた眼をしていながら、その兵隊は上半身裸体のまま起き上って歩き出そうとする。③それも全く口をきかずに。(p84)
- (55) ①街道へ出ると、五間程先の道端に上半身裸体にされた兵隊が仰向けに背囊に寄りかかって寝ていた。②一人が看護している。③胸にハンケチを当てて、それに水筒から水をたらしていた。④病人は意識も不確らしく眼をつぶったまま、力

なく口を開けていた。⑤その癖顔だけは汗ばんでかなり赤い。⑥立ち止まって見るのがいやだった。(p82.83)

(56) ①小学校の前で従弟と別れた。②そして夕方の畑道を急いで来た。③自分は一人になるとまた興奮して来た。④それは余りに明か過ぎる事だと思った。⑤それは早晩如何な人にもハッキリしないではない事がらだ。⑥何しろ明か過ぎる事だ、と思った。⑦総ては全く無知から来ているのだと思った。(p85)

(57) ①人々の眼は倒れた人を見た。②然し黙っている。③皆は見ながら黙って急ぐ。(p83)

(58) ①二人はあまり注意もせず話しながら来たが、その一隊は寧ろ案外な早さで、間もなく自分達の直ぐ背後に迫って来た。

②「きっと敵を追いかけているんですよ」と従弟が云った。

③この蒸暑いのに皆外套を着ている。④幾ら暑くてもそれは命令で勝手には脱げないらしい。⑤帽子だけは皆手に持っていた。⑥それにはやはり白い布が巻いてあった。⑦然しそれも先頭に歩いていた若い士官が一寸後ろを向いて何か簡単な号令をかけた時に皆は被って了った。⑧蒸し風呂から出てきた人のような汗が皆の顔に流れている。⑨そして全く黙り込んで、只急ぐ。(p80)

(59) ①同じような人が又来た。②その顔には何の表情もない。③苦痛の表情さえも現れない程苦しいのだと云う気がした。④丁度踏切りを越える時に足がレールの僅かな溝に引掛ると、その人は突き飛ばされたように前へのめって了った。⑤支えていた兵隊の腕にも力はなかった。⑥そして倒れた人は何も云わない。⑦倒れたきりでいる。(p83)

(60) ①十間来ると其処に又一人倒れていた。②どれもこれも、ぼんやりと何の表情もない顔をしている。(p84)

(61) ①自分は不知、道を間違えていた。②まがる所をまがらず

に来たのだ。(p85)

(62) ①それからだらだらの切通しを下りて来ると其処で二百人ばかりの歩兵の一隊と擦れ違った。②かなりの急ぎ足で歩いている。③隊の中頃へ来て自分は全くまいって了った一人の兵隊を見た。④両側から一人ずつその腋の下に腕を差し込んでまいったままにどンドン隊の歩度で急いでいく。⑤その兵隊はもう眼を開いてはいなかった。⑥そして泥酔した人のように、肩に据わらない首を一足毎に仰向けに、或いは右に左に振っていた。(p83)

(63) ①帰ると直ぐ自分は風呂敷の鴨を出して見た。②羽がいを交叉してその下に首を仰向けに差し込んであった。③この間まで鳩を入れて置いた小屋の中で自分はそれを自由にしてやった。④然し鴨は半死になっていた。⑤羽ばたきをして地面をかけようとするが首がもう上らない。⑥のどを延ばして、それを地面にすりつけて只もがいた。⑦自分は出して池へ放して見た。⑧然し何故か真直ぐには浮かばない。(p85)

6.5 もう一つの解釈の可能性

物語文の文章構成の観点からの分析は、6.1～6.4の結果となる。しかし、例(52)(56)はもう一つの視点による説明も可能である。用例を再掲する。

(64) ①倒れた人は起きようとした。②俯伏しに延び切った身体を縮めて一寸腰の所を高くした。③然しもう力はなかった。④直ぐたわいなくつぶれて了う。⑤二三度その動作を繰り返した。⑥芝居で殺された奴が俯伏しになった場合よくそう云う動作をする。⑦それが一寸不快に自分の頭に映った。(p84)

(65) ①自分は一人になるとまた興奮して来た。②それは余りに明か過ぎる事だと思った。③それは早晩如何な人にもハッキリしないではない事がらだ。④何しろ明か過ぎる事だ、と思った。⑤総ては全く無知から来ているのだと思った。(p85)

例(64)の二つのル形の使用は、いずれも後続の文と合わせて一つ

文に書き換えられる。例えば、「直ぐたわいなくつぶれて了う動作を二三度繰り返した／芝居で殺された奴が俯伏しになった場合よくするこの動作が一寸不快に自分の頭に映った」が可能である。このような文は、後続文脈に従属する性格があり、いわゆる従属文(野田1998)としても認められる。繰り返された動作ではあるが、従属文の性格のあるため、ル形になる必然性も高くなると考えられる。

例(65)は、文②～⑤は全部主人公の心話である。文②④⑤には「と思った」があり、③だけが引用動詞の使用がなかったが、内容は引用句の一部と認められる。動作・作用の一コマではなく、その場での心話の内容であるため、ル形になるのも分かる。

6.6 文章構成の観点からのまとめ

6.1～6.5 で述べた文章構成の観点による分析は以下の結論にまとめられる。

(66) a. 「第二の描写」(主人公が目にした外界情景)、「第一の説明」(背景説明)、「第二の説明」(状況説明)はル形になりやすい。

b. 言い換えると、物語の本筋を構成する、「～した」の文末表現を持つ「第一の描写」(話の筋)以外は、ル形になりやすい。

c. 心話もル形になりやすく、また、従属度の高い文は、ル形になる必然性も高い。

a については、多くの先行研究ではその理由が述べられている。例えば、4.2 節の「その場において状況を描写する臨場感のある視点」(石黒2004)、「作中人物の視点に寄りそった、生き生きとした描写」「目の前にその状態が存在していたり、今まさにその事態が展開している」(日本語記述文法研究会2007)などである。外界的な状況や説明的な内容ということで、静的述語が使われるのが特徴的である。一言で簡単に言うと、いわゆる臨場感の表現効果を狙った表現方法である。問題は、物語の本筋として使われる一回限りの動作を表す「第一描写」の「云う」「来る」である。次節で考える。

7. 物語の本筋にル形が使われる理由―「云う」「来る」の検討―

7.1 ル形がタ形により締めくくられる。

「云う」「来る」のル形について考える時に、4.2.1節の「歴史的現在」が参考となる。「現在形表現は、過去形表現によって何らかの形で締めくくられる」(永野 1986)の特徴が指摘されている。6.1節の例(46)(47)を、前後文脈を増やし再掲する。

(67) ①東源寺と云う榎の大木で名高い寺への近道の棒杭のある所から街頭を外れて入った。②左手の畑道を騎兵が七八騎一列になって、馬を暢気に歩かせていた。③間もなく、自分達は竹藪の中のじゅくじゅくした細い坂路を下りて、目的の鴨屋へ行った。

④鴨は一羽もなかった。⑤その朝丁度東京へ出したところだと云う。⑥そして「今あるのはおしどり位です」と云った。⑦それを見た。⑧然しおしどりは未だ少しも馴れていなかった。⑨柵の隅で出来るだけ小さくなって、片方の眼だけを此方へ向けて如何にも不安らしい様子をしていた。⑩「雄はまだ雛です。別々に捕ったので親子でないから雌に押されているんですよ」主は雄が地面へ腹をつけたきりで、若し歩いても中腰でヨタヨタしているのを弁解するように云った。
(p81)

(68) ①二三発続いて銃声がした。②近い所で、急に鴨が頓狂な声で鳴き立てた。③遠くの方で小鴨の一群が飛び立った。④銃声は尚続いた。⑤脅かされて、鴨の群は段々高く舞い上がった。

⑥同じ堤防の上を此方へ向かって二十騎程の騎兵が早足で来る。⑦そして間もなく銃声は止んだ。⑧二人は堤防を下りて引き返して来た。(p81)

この二例は、「第一の描写」(話の筋)が続く内容で、「～した」を中心とする文末表現は、継起した出来事の一コマ一コマを描くも

のである。ル形の使用と前後の文脈を入れると、その連続した動作は以下にまとめられる。

(69) ①「入った」、③「行った」、⑤「云う」、⑥「云った」、
⑦「見た」、⑩「云った」

(70) ①「銃声がした」、②「鳴き立てた」、③「飛び立った」、
④「続いた」、⑤「舞い上がった」、⑥「来る」、⑦「止んだ」、
⑧「引き返して来た」

この二例の文①③⑤⑥⑦⑩、文①②③④⑤⑥⑦⑧は、連続して起こった動作の描写である。「云う」「来る」の使用はあるが、何れもその後続文脈に「云った」「引き返して来た」のタ形の表現があり、ル形はタ形により締めくくられているという現象が見られる。これは永野(1986:268)が指摘する「歴史的現在」で説明できることを確認できる。

ここでは、以下の二点も指摘しておきたい。まずは、今回の調査では、ル形はタ形により締めくくられる現象は、「第一の描写」(話の筋)に限ってのことである。例えば、6.4節の「第二の説明」(解説)は、前の文脈から一つ的话题を引き継ぎ説明を加えるという働きを持つもので、このような用例には、例(53)(57)(59)(60)のようなル形で終わる場合も多くあり、タ形で締めくくられる現象が多いとは言いがたい⁶。次に、二点目としては、「第一の描写」(話の筋)にはル形はタ形により締めくくられる現象が見られるが、今回の調査では二例しかなく、その数は実に少ないことにも注意しておきたい。過去の出来事の本筋を構成する「第一の描写」(話の筋)には、基本的にはタ形が使われ、ル形の使用はよくある現象ではない。

「第一の描写」(話の筋)にしか見られない現象と、その使用は多くはない、この二点は、今回の調査で分かったことで、大事にしておきたい。

7.2 新聞記事に見る文末表現の省略

⁶ この四例のル形は何れも段落の最後の文で、後続文脈がないため、タ形に締めくくられるとは考えられない。

この節では「ル形はタ形により締めくくられる」に類似した現象を一つ挙げる。新聞記事の文末の省略である。本論文の内容とは直接な関係はないが、参考として触れておきたいと思う。以下、アメリカ大リーグに関するネットニュースとして、「マエケン 7 回 2 失点で今季 2 勝目！今季初の QS で復調アピール」⁷というタイトルの記事の全文を取り上げる。

(71) ①ドジャースの前田健太投手(29)は 28 日(日本時間 29 日)のフィリーズ戦に今季 5 度目の先発。②7 回を投げて 5 安打 8 奪三振 2 失点と好投を見せ、今季 2 勝目(2 敗)を挙げた。

③初回、2 回と連続で三者凡退。④上々の立ち上がりを見せた前田だったが、3 回に 2 失点。⑤四球と安打で 2 死一、三塁とピンチを迎えると、ガルビスに甘いカーブを叩かれ、右翼線への 2 点適時二塁打を浴びた。

⑥それでも、味方打線は前田を援護。⑦4 回に同点に追いつくと、5 回には女房役グランダルde犠飛で 3—2 と勝ち越し。⑧さらに、6 回にはターナーの 2 点適時打で 5—2 とリードを広げた。

⑨前田は 4 回と 5 回はそれぞれ安打を浴びながらも無失点。⑩今季最長となった 6 回は 3 番から始まる打線を三者凡退。⑪最後のイニングとなった 7 回は 2 死から二塁打を許したが、代打・ケリーを 148 キロのストレートで空振りの三振に切って取り、3 点目のホームを踏ませなかった。

⑫この日の球数は 101 球。⑬開幕から不振が続いていた前田は、5 度目の登板でシーズン初のクオリティースタート(QS)とし、復調をアピールした。

⑭試合は 8 回に 1 失点したものの、5—3 でドジャースがリードを守り切った。

この記事は、計 6 段落 14 文があり、文末表現が整ったのは 6 例

⁷ スポニチアネックス 2017. 4. 29(土) 14:19 配信。

しかなく、省略されたのは8文もある。各段落のすべての文の文末表現をまとめると以下となる。

(72) 第一段落：①「先発」②「挙げた」

第二段落：③「三者凡退」④「二失点」⑤「浴びた」

第三段落：⑥「援護」⑦「勝ち越し」⑧「広げた」

第四段落：⑨「無失点」⑩「三者凡退」⑪「踏ませなかった」

第五段落：⑫「101球」⑬「アピールした」

第六段落：⑭「守りきった」

第一段落から第五段落は、二つ以上の文で構成されている。この五つの段落は、すべて「省略の文」が前にあり、「非省略の文」が段落の最後に来ている。この配列からは、「省略の文」が「非省略の文」により締めくくられているということが言える。文末表現は、段落の最後で締めくくるという現象があるようである。この点は、「第一の描写」(話の筋)に見られるル形の使用に通じる。本来はあったはずの「タ形」と文末表現の使用はなかったが、それが後続文脈で補われる。話の筋のル形の使用と、新聞記事の文末表現の省略に見られるこの共通点は、日本語の特徴の一つとして考えられ、今後の課題の一つとしてもう少し深入りしたい。

8. おわりに

本論文では、文末表現と文章構成の観点から、小説の地の文のル形の使用状況と原因などについて分析を試みた。現時点の主な結論は以下となる。

- a. いつものこと、外界描写、背景・状況説明はル形になりやすく、テイル、イ、ダの文末表現が使われる。
- b. 心話もル形になりやすく、また、従属度の高い文は、ル形になる必然性も高い。
- c. シタの文は物語の本筋を構成し、動作の継起を表すため、ル形になりにくい。
- d. しかし、後続文脈でタ形に締めくくられる場合は、ル形にな

ることもある。

今回は、ル形の使用という理解の側面について考察を試みた。日本語学習者が感じる疑問への答えはある程度得られたと思う。また、「全体的表現と部分的要素」「文脈重視の概念」「ジャンル別の視点」の視点を用いることで、王(2108a)が提唱する「運用能力のための語学知識」を実践した成果とも考えられる。しかし、産出の側面も課題として残る。今後の研究課題とする。

参考文献(筆著名五十音順)

- 庵功雄(2016)「「産出のための文法」から見た「は」と「が」」『日本語文法研究のフロンティア』くろしお出版、pp. 289-306
- 庵功雄ほか編(2017)『中国語話者のための日本語教育文法を求めて』日中言語文化出版社
- 石黒圭(2004)「「～した。」「～した。」と延々と続く文末の単調さをどう解決したらいいか」『国文学』49-7、pp. 42-49
- 井上優(2005)「学習者の母語を考慮した日本語教育文法」『コミュニケーションのための日本語教育文法』くろしお出版、pp. 83-102
- 井上優(2007)『対照研究の成果を生かした中国語母語話者向け日本語文法教材の開発』国立国語研究所、研究成果報告書
- 王世和(2018a)「日本語教育のための文法研究」『東呉日語教育學報』50、pp. 1-27
- 王世和(2018b)「文脈重視の日本語教育文法の研究—テイルの用法を例に一」『台灣日語教育學報』30、pp. 110-136
- 工藤真由美(2014)『現代日本語ムード・テンス・アスペクト』ひつじ書房
- 張麟声(2007)『中国語話者のための日本語教育研究入門』大阪公立大学共同出版会
- 永尾章曹(1975)『国語表現法研究』東京：三弥井書店
- 永尾章曹(1992)「描写と説明について」『国語学論集：小林芳規博士

- 退官記念』東京：汲古書院、pp.717-738
- 永野賢(1986)『文章論総説』朝倉書店
- 日本語記述文法研究会(2007)『現代日本語文法3』、くろしお出版
- 野田尚史(1998)「「ていねいさ」からみた文章・談話の構造」『国語学』194、pp.102-89、国語学会
- 野田尚史(2005)「コミュニケーションのための日本語教育文法の設計図」『コミュニケーションのための日本語教育文法』くろしお出版、pp.1-20
- 野田尚史(2016)「非母語話者の日本語理解のための文法」『日本語文法研究のフロンティア』くろしお出版、pp.307-326